

## 主 日 前 晩 課

### 第2調

注意 譜面中、五線譜上に  $\parallel\circ\parallel$  とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞（祈禱文）が持つ言葉の自然なリズムに則って歌うことを意味しています。ただ早く歌ってしまったり、棒読みになってしまったりしないよう、気をつけてください。この聖歌譜はそのために、歌詞の意味をとることが容易になるよう漢字を多く用いて作成しています。

2023年8月 釧路管轄司祭ステファン内田 作成

司祭) われら かみ つね あが ほ いま いつ よよ  
我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、



司祭) きた われら おう かみ こうはい  
來れ、我等の王・神に叩拜せん、

きた われら おう かみ こうはいふふく  
來れ、ハリストス・我等の王・神に叩拜俯伏せん、

きた われら おう かみ まえ こうはいふふく  
來れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩拜俯伏せん、

きた かれ こうはいふふく  
來れ、彼に叩拜俯伏せん、

【 第103 聖詠 (首誦聖詠：我が靈よ主を讃め揚げよ) 】

わ が た ま し い よ お、しゅを ほ め え あ げ よ。  
我 靈 主 讃 揚

しゅ よ、なんぢは あ が め ほ め え ら る。しゅ  
主 爾 崇 讃 主

わ が か み よ、なんぢは い た っ て お お い な り。  
我 神 爾 至 大

しゅ よ、なんぢは あ が め ほ め え ら る。な  
主 爾 崇 讃 爾

んぢは こ お え い と い げ ん と を こ お む う れ り。  
光 榮 威 嚴 被

しゅ よ、なんぢは あ が め ほ め え ら る。や ま  
主 爾 崇 讃 山

の い た だ あ き に い み づ た つ う み い づ た 立  
嶺 水 立 水 立



つ 。 しゅ うよ 、 なん ちのしわざあは あ き い い な  
主 爾 工 業 奇 異



り 。



やまの あいだ あに い み づ な が る う、 み い  
山 間 水 流 水



づ なあが る 。 しゅ うよ 、 なん ちのしわざあは あ き い  
流 主 爾 工 業 奇



い な り 。



み な ち え を も っ て つ く れ り ち え  
皆 智 慧 以 作 智 慧



を も っ て つ く れ り 。



こ お え い は な ん ち ば ん ぶ つ を つ く り し しゅ に い き  
光 榮 爾 萬 物 作 主 歸



す 。



こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も  
光 榮 父 子 聖 神 歸 今



い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。  
何 時 世 世

ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、か み  
神

よ こ う え い は なんぢに き す 。  
光 榮 爾 歸

ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、か み  
神

よ こ う え い は なんぢに き す 。  
光 榮 爾 歸

ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、か み  
神

よ こ う え い は なんぢに き す 。  
光 榮 爾 歸

【 大聯禱 】

司祭) われらあんわ しゅ いの  
我等安和にして主に禱らん、

しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐

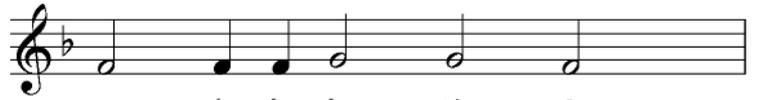
司祭) うえ くだ あんわ われら たましい すくい ため しゅ いの  
上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、

しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐

司祭) ぜんせかい あんわ かみ せい しよきようかい けんりつ およ しゅうじん ごういつ ため しゅ いの  
全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱ら  
ん、

しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐

司祭) こ せいどう およ しん つつしみ かみ おそ こころ もつ ここ きた もの ため しゅ いの  
此の聖堂、及び信と慎と神を畏るる心とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、

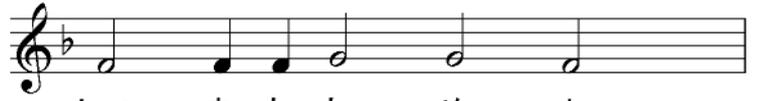


しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) 教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教ダニイル、尊貴なる我等の仙台の

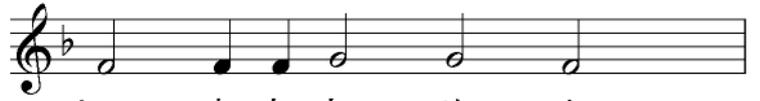
大主教セラフィム、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び

衆人の爲に主に禱らん、



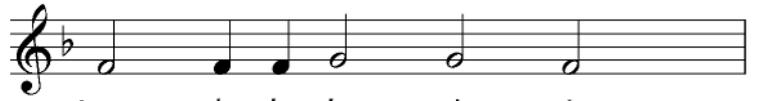
しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) 我國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん、



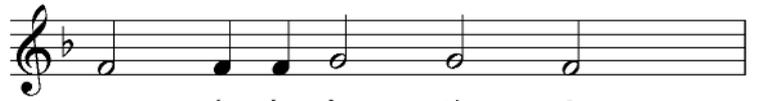
しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) 此の都邑と凡の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) 氣候順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) 航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び

彼等の救の爲に主に禱らん、



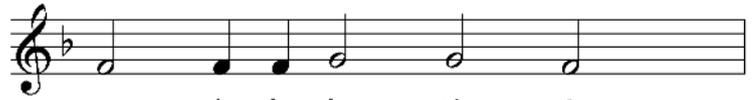
しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

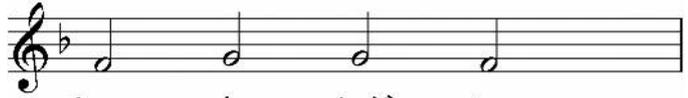


しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>しせいしけつ</sup> 至聖至潔にして <sup>いた</sup> 至りて <sup>さんび</sup> 讚美たる <sup>われら</sup> 我等の <sup>こうえい</sup> 光榮の <sup>ぢよさい</sup> 女宰、<sup>しょうしんぢよ</sup> 生神女、<sup>えいていどうぢよ</sup> 永貞童女マリヤと、

<sup>しよせいじん</sup> 諸聖人 <sup>きおく</sup> を記憶して、<sup>われらおのれ</sup> 我等己の <sup>みおよ</sup> 身及び <sup>たがい</sup> 互に <sup>おのおの</sup> 各の <sup>み</sup> 身を以て、<sup>もつ</sup> 並に <sup>ならび</sup> 悉くの <sup>ことごと</sup> 我等の

<sup>いのち</sup> 生命を以て、<sup>もつ</sup> ハリストス <sup>かみ</sup> 神に <sup>いたく</sup> 委託せん、



しゅ な んぢ に 。  
主 爾

司祭) <sup>けだし</sup> 蓋、<sup>およ</sup> 凡そ <sup>こうえい</sup> 光榮 <sup>そんきふくはい</sup> 尊貴 <sup>なんぢちち</sup> 伏拜は <sup>こ</sup> 爾父と子と <sup>せいしん</sup> 聖神に <sup>き</sup> 歸す、<sup>いま</sup> 今も <sup>いつ</sup> 何時も <sup>よよ</sup> 世世に、

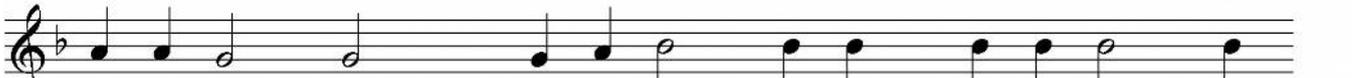


ア ミ ン。

【 第一カフィズマ 第一段 】



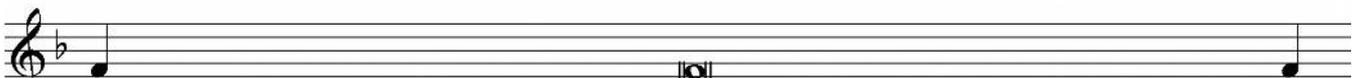
あくにんのはかりごとによかざるひとはさい  
悪 人 謀 行 人 福



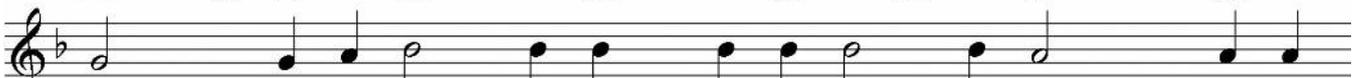
わいなり、アリル イヤ、アリル イ



ヤ、アリル イヤ。



しゅはぎじんのみちをしる、あくにんのみちはほろ  
主 義 人 途 知 悪 人 途 滅



びん、アリル イヤ、アリル イヤ、アリ



ル イヤ。

おそれしゆにつとめよ、おののきてそのまえ  
 畏 主 勤 戦 其 前  
 によろこべよ、ア ril ル イ ヤ、ア ril ル イ  
 喜  
 ヤ、ア ril ル イ ヤ。

およそかれをたのむものはさいわいなり、  
 凡 彼 侍 者 福  
 ア ril ル イ ヤ、ア ril ル イ ヤ、ア ril ル  
 イ ヤ。

しゆやたてよ、わがかみや、われをすくいた給  
 主 立 吾 神 我 救 給  
 まえ、ア ril ル イ ヤ、ア ril ル イ ヤ、  
 ア ril ル イ ヤ。

すくいしゆによるなんぢのこうふくはなんぢのた  
 救 主 依 爾 降 福 爾 民  
 みにあり、ア ril ル イ ヤ、ア ril ル イ  
 在  
 ヤ、ア ril ル イ ヤ。

こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も  
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今  
 い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。 ア リ ル イ ヤ 、 ア  
 何 時 世 世  
 リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわ <sup>しゅ いの</sup> 我等復又安和にして主に禱らん、

しゅ あ わ れ め よ 。  
 主 憐

司祭) かみ <sup>なんぢ</sup> 神よ、爾の恩寵を以て、われら <sup>たす すく</sup> 我等を助け救い <sup>あわれ</sup> 憐み <sup>まも</sup> 護れよ、

しゅ あ わ れ め よ 。  
 主 憐

司祭) <sup>しせいしけつ</sup> 至聖至潔にして <sup>いた</sup> 至りて <sup>さんび</sup> 讚美たる <sup>われら</sup> 我等の <sup>こうえい</sup> 光榮の <sup>ぢよさい</sup> 女宰、<sup>しょうしんぢよ</sup> 生神女、<sup>えいていどうぢよ</sup> 永貞童女マリヤと、

<sup>しよせいじん</sup> 諸聖人を記憶して、<sup>きおく</sup> 我等 <sup>われら</sup> 己の <sup>おのれ</sup> 身及び <sup>みおよ</sup> 互に <sup>たがい</sup> 各の <sup>おのおの</sup> 身を以て、<sup>み</sup> 並に <sup>もつ</sup> 悉くの <sup>ならび</sup> 我等の <sup>ことごと</sup> 我等の <sup>われら</sup>

<sup>いのち</sup> 生命を以て、<sup>もつ</sup> ハリストス <sup>かみ</sup> 神に <sup>いたく</sup> 委託せん、

しゅ な ん ぢ に 。  
 主 爾

司祭) <sup>けだしけんぺいおよ</sup> 蓋権柄及び <sup>くに</sup> 國と <sup>けんのお</sup> 権能と <sup>こうえい</sup> 光榮は <sup>なんぢちち</sup> 爾父と <sup>こ</sup> 子と <sup>せいしん</sup> 聖神に <sup>き</sup> 歸す、<sup>いま</sup> 今も <sup>いつ</sup> 何時も <sup>よよ</sup> 世世に、

ア ミ ン 。

【 第140聖詠 (主よ爾に籲ぶ) 第2調 】

しゅよ、なんぢによぶ、すみやかにわれにいたり格  
 主 爾 呼 速 我 格  
 たまえ、しゅよわれにききたまあ  
 給 主 我 聽 給 あ  
 え、しゅよ、なんぢによぶ、すみやかにわれ  
 主 爾 呼 速 我  
 にいたりたまえ、なんぢによぶときわがい祈  
 格 給 爾 呼 時 我 祈  
 のりのこえをいれたたまあえ、しゅよわれ  
 聲 納 給 あ え、主 我  
 にききたまあえ。  
 聽 給 あ え。  
 ねがわくはわがいのりはこうろのかおりのご如  
 願 我 祈 香 爐 香 如  
 とくなんぢがかんばせのまえにのぼり、  
 爾 顔 前 登  
 わがてをあぐるはくれのまつりのごとくい納  
 我 手 舉 暮 祭 如 納  
 れられん。しゅよ、われにききたまあ  
 主 我 聽 給 あ  
 え。

誦經) しゅ わくち まもり お わくちびる もん ふせ たま わ こころ よこしま ことば かたぶ  
 主よ、我が口に 衛を置き、我が唇の門を扞ぎ給え、我が心に 邪なる言に傾

きて、不法を行 う人と共に、罪の推諉せしむる母れ、願わくは我は彼等の甘味を嘗め

ぎじん われ ぼつ こ きょうじゅつ われ せ こ い うるわ あぶら わ  
ざらん。義人は我を罰すべし、是れ矜 恤 なり、我を譴むべし、是れ極と 美 しみき 膏 、我  
こうべ なや あた もの ただわ いのり かれら あくじ てき かれら しゅちょう いわお  
が 首 を悩ます能わざる者なり、唯我が 禱 は彼等の惡事に敵す。彼等の 首 長 は巖石の  
あいだ さん わ ことば にゆうわ き われら つち ごと き くだ わ ほね ちごく くち  
間 に散じ、我が 言 の 柔 和なるを聴く。我等を土の如く斫り碎き、我が 骨 は地獄の口  
ち お しゅ しゅ ただわ め なんぢ あお われなんぢ たの わ たましい しりぞ なか  
散りて落つ。主よ、主よ、唯我が目は 爾 を仰ぎ、我 爾 を恃む、我が 靈 を 退 くる毋  
わ ため もう わな ふほうしゃ あみ われ まも たま ふけんしゃ おのれ あみ かか  
れ。我が爲に設けられし 罟、不法者の網より我を護り給え。不虔者は 己 の網に罹り、  
ただわれ す え  
唯 我 は過ぐるを得ん。

【 第 1 4 1 聖 詠 】

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい  
我が 聲 を以て主に呼び、我が 聲 を以て主に禱り、我が 禱 を其前に注ぎ、我が 憂 を  
そのまえ あらわ わ たましい うち よわ とき なんぢ われ みち し わ ゆ みち おい  
其前に 顯 せり。我が 靈 の衷に弱りし時、 爾 は我の途を知れり、我が行く路に於て、  
かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと もの われ  
彼等は 竊 に我が爲に網を設けたり。我 右 に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我  
のが ところ わ たましい かえりみ もの しゅ われなんぢ よ い なんぢ われ  
に遁るる所なく、我が 靈 を 願 する者なし。主よ、我 爾 に呼びて云えり、 爾 は我の  
かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま われはなはだよわ  
避 所 なり、生ける者の地に於いて我の分なり。我が呼ぶを聴き給え、我 甚 弱りたれば  
われ はくがい もの すく たま かれら われ つよ  
なり、我を迫害する者より救い給え、彼等は我より強ければなり。

句⑩ 我が 靈 を 獄 より引き出して、我に 爾 の名を讚 榮せしめ給え。

きた よ な さき ちち うま かみ ことば どうていちよ み と もの ふくはい  
讚詞⑩ 來りて、世の無き先に父より生れし神の 言 、童 貞 女 マリヤより身を取りし者に伏 拜  
けだしかれ みづか のぞ ごと じゅうじか しの ほうむり わた し ふくかつ  
せん。蓋 彼は 親 ら望みし如く、十 字 架を忍びて、 葬 に付されたり、死より復 活し  
われまよ ひと すく たま  
て、我 迷 える人を救い給えり。

句⑨ 爾 恩 を我に賜わん時、義人は我を環らん。

わ きゅうせいしゅ われら つみ かきつけ じゅうじか くぎ これ け し けん  
讚詞⑨ ハリストス我が 救 世 主は我等を罪する書 券 を十 字 架に釘うちて之を抹し、死の權  
むな たま われらそのみつかめ ふくかつ ふくはい  
を空しくし給えり。我等其 三 日目の復 活 に伏 拜 す。

句⑧ 主よ、我 深 き處より 爾 に呼ぶ。主よ、我が 聲 を聴き給え、

われら てんししゅ とも ふくかつ ほ うた けだしかれ われら たましい しょくざい  
讚詞⑧ 我等は天使首と共にハリストスの復 活 を讚め歌わん。蓋 彼は我等の 靈 の贖 罪  
しゅおよ きゅうせいしゅ かつおそ こうえい つよ ちから もつ またきた そのつく せかい  
主 及び 救 世 主 なり、且 畏 るべき光 榮 と 勁 き能力とを以て還 來りて、其 造りし世界  
しんぱん  
を 審 判 せん。

句⑦ <sup>ねが なんぢ みみ わ いのり こえ き い</sup> 願わくは 爾 の 耳は我が 禱 の 聲を聴き納れん。

讃詞⑦ <sup>てんし なんぢじゅうじか てい ほうむ しゅさい つた おんなたち い きた</sup> 天使は 爾 十 字架に釘せられて 葬 られたる 主宰を傳えて、女 等に言えり、  
<sup>しゅ ふ ところ み けだしかれ い ごと ふくかつ ぜんのうしゃ ゆえ われら</sup> 主の臥したる 處を觀よ、蓋 彼は言いし如く復活せり、全能者なればなり。故に我等  
<sup>なんぢゆいいちふし もの ふくはい いのち たま われら あわれ たま</sup> 爾 唯一不死の者に伏拜す。生命を賜うハリストスよ、我等を 憐み給え。

句⑥ <sup>しゅ も なんぢふほう ただ しゅ だれ よ た しか なんぢ ゆるし ひと なんぢ</sup> 主よ、若し 爾 不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども 爾 に 赦 あり、人の 爾  
<sup>まえ つつし ため</sup> の前に 敬 まん爲なり。

讃詞⑥ <sup>なんぢ じゅうじか き よ のろい むな なんぢ ほうむり し けん ほろぼ なんぢ ふく</sup> 爾 の 十 字架にて木に縁る 詛を空しくし、爾 の 葬 にて死の權を滅し、爾 の復  
<sup>かつ じんるい てら たま ゆえ われらなんぢ よ おんしゅ わ かみ こうえい なんぢ</sup> 活にて人類を照し給えり。故に我等 爾 に籲ぶ、恩 主ハリストス吾が神よ、光 榮は 爾  
<sup>き</sup> に歸す。

句⑤ <sup>われしゅ のぞ わ たましいしゅ のぞ われかれ ことば たの</sup> 我 主を望み、我が 靈 主を望み、我彼の 言を待む。

讃詞⑤ <sup>しゅ し もん おそれ よ なんぢ ため ひら ぢごく かどもり なんぢ み おそ けだし</sup> 主よ、死の門は畏懼に因りて 爾 の爲に啓け、地獄の門衛は 爾 を見て懼れたり、蓋  
<sup>なんぢ あかがね もん やぶ くろがね はしら くじ われら くらやみ し かげ ひ いだ われら</sup> 爾 は 銅 の門を破り、鐵 の柱を折き、我等を幽闇と死の蔭より引き出し、我等  
<sup>なわめ た たま</sup> の 縛を截ち給えり。

句④ <sup>わ たましいしゅ ま ぼんにん あさ ま ぼんにん あさ ま はなはだ</sup> 我が 靈 主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより 甚し。

讃詞④ <sup>すくい うた うた くち ひと よ みなきた しゅ いえ ふくはい い き</sup> 救の歌を歌いて、口を齋しくして籲ばん、皆 來りて、主の家に伏拜して曰わん、木  
<sup>うえ てい し ふくかつ ちち ふところ いま しゅ われら つみ きよ たま</sup> 上に釘せられて、死より復活し、父の 懷に在す主よ、我等の罪を淨め給え。

句③ <sup>ねが しゅ たの けだしあわれみ しゅ おおい あがない かれ かれ</sup> 願わくはイスライリは主を恃まん、蓋 憐は主にあり、大なる 贖も彼にあり、彼  
<sup>そのことごと ふほう あがな</sup> はイスライリを其 悉くの不法より 贖わん。

讃詞③ <sup>たより もの けんご たのみ つみ おちい もの すくい ほ うた いさぎよ しょう</sup> 倚頼なき者の堅固なる憑恃、罪に 陥る者の拯救たる讃め歌わるるマリヤ、潔き生  
<sup>しんぢよ わ こ いのり う なんぢ はは きとう もつ われ しょうがいおか しょうがい ゆるし</sup> 神女よ、我が此の 禱を受けて、爾 の母たる祈禱を以て我に生 涯犯しし諸罪の赦  
<sup>え たま ぢよさい なんぢ おおい あわれみ よ われ きなんおよ しょうらい ていざい</sup> を獲しめ給え。女 宰よ、爾 の大なる 憐に由りて、我を危難及び将 來の定罪よ  
<sup>すく たま</sup> り救い給え。

句② <sup>ばんみん しゅ ほ あ ぼんぞく かれ あが ほ</sup> 萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ、

讚詞② わ がいせい ひ あ あ がいあく み きょうあく はなはだ われ みだ よ  
我が在世の日は悪し、悪くして罪惡に充つ、凶惡なるサタナ甚しく我を擾すに因

かみ はは なんぢわれ そのがい まぬか しせい もの なんぢわれ そのくち のが たま  
る。神の母よ、爾我を其害より免れしめ、至聖なる者よ、爾我を其口より脱し給

われことごと たのみ なんぢ お なんぢ ねつせつ きとう もつ われ すく たま  
え、我悉くの憑恃を爾に負わせたればなり。爾の熱切なる祈禱を以て我を救い給

え。

句① けだしかれ われら ほどこ あわれみ おおい しゅ しんじつ なが そんな  
蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

讚詞① はぢ え てんたつしゃ よろこ しぜん しょうしんぢよ よろこ せかい きよめ よろこ  
耻を得ざる轉達者よ、慶べ、至善なる生神女よ、慶べ、世界の蠲潔よ、慶べ、

かな もの よろこび ぐふう あ もの みなと よろこ およ きなん あ もの ふじよしゃ よろこ  
悲しむ者の喜、颶風に遭う者の停泊よ、慶べ、凡そ危難に在る者の扶助者よ、慶

どうていちよ じゅんけつ ぢよさい われ ことごと くなん まも たま  
べ。童貞女・純潔なる女宰よ、我をも悉くの苦難より護り給え。

【 ドグマチカ (生神女讚詞) 第2調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も  
光 榮 父 子 聖 神 歸 今  
い つ も よ よ お に 、 ア ミ ン 。  
何 時 世 世  
お ん ち ょ う き た り て ほ う り つ の か げ は さ れ り 、  
恩 寵 來 法 律 の 影 は 去  
け だ し も ゆ る い ば ら の や け ざ り し ご と お  
蓋 燃 棘 焚 如  
く 、 ど う て い ぢ よ は う み し の ち も な が く ど う  
童 貞 女 生 後 永 童  
て い ぢ よ な り 、 ほ の お の は し ら の か わ り に  
貞 女 焰 柱 代  
ぎ の ひ は い で て ひ か あ る 、 モ イ セ イ の か 代  
義 日 出 光

わ あり い に わ が た ま し い の き ゅ う し や ハ リ ス ト ス は あ  
 我 靈 救 者 現  
 ら わ れ た あ り 。

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、<sup>つつし</sup> 肅 <sup>た</sup> みて立て、

【 聖ソフロニイの祝文 】

せ い に し て ふ く た る じ ょ う せ い な る て ん の ち ち の  
 聖 福 常 生 天 父  
 せ い な る こ う え い の お だ や か な る ひ か り イ イ  
 聖 光 榮 穩 光  
 ス ス ハ リ ス ト ス よ 、 わ れ ら ひ の い り に い た り く 暮  
 我 等 日 入 至 暮  
 れ の ひ か り を み て 、 か み ち ち と こ と せ い し ん  
 光 を 見 神 父 子 聖 神  
 を う と お う 。 い の ち を た も う か み の こ 子  
 歌 生 命 賜 神 子  
 よ 、 な ん ぢ は い つ も け い け ん の こ え に て う た わ  
 爾 何 時 敬 虔 聲 歌  
 る べ し 、 ゆ え に せ か い は な ん ぢ を あ が め  
 故 世 界 爾 崇  
 ほ む 。

【 大プロキメン 第6調 】

司祭) <sup>つつし</sup> 謹 <sup>みて</sup> 聴くべし、<sup>しゅうじん</sup> 衆 <sup>へいあん</sup> 人に平安、<sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>プロキメン</sup> 提綱、<sup>しゅ</sup> 主は<sup>おう</sup> 王たり、<sup>かれ</sup> 彼は<sup>いげん</sup> 威嚴を<sup>き</sup> 衣たり、



しゅ は お う た り 、 か れ は い げ ん を き た  
主 王 彼 威 嚴 衣



り 、

誦經) <sup>しゅ</sup> 主は<sup>のうりよく</sup> 能力を<sup>き</sup> 衣、<sup>またこれ</sup> 又之を<sup>おび</sup> 帯にせり、



しゅ は お う た り 、 か れ は い げ ん を き た  
主 王 彼 威 嚴 衣



り 、

誦經) <sup>ゆえ</sup> 故に<sup>せかい</sup> 世界は<sup>けんご</sup> 堅固にして<sup>うご</sup> 動かざらん、



しゅ は お う た り 、 か れ は い げ ん を き た  
主 王 彼 威 嚴 衣



り 、

誦經) <sup>しゅ</sup> 主よ、<sup>せいとく</sup> 聖徳は<sup>なんぢ</sup> 爾の<sup>いえ</sup> 家に<sup>ぞく</sup> 屬して<sup>えいえん</sup> 永遠に<sup>いた</sup> 至らん、



しゅ は お う た り 、 か れ は い げ ん を き た  
主 王 彼 威 嚴 衣



り 、

誦經) <sup>しゅ</sup> 主は<sup>おう</sup> 王たり、



かれはいげんをきたり。  
彼 威厳 衣

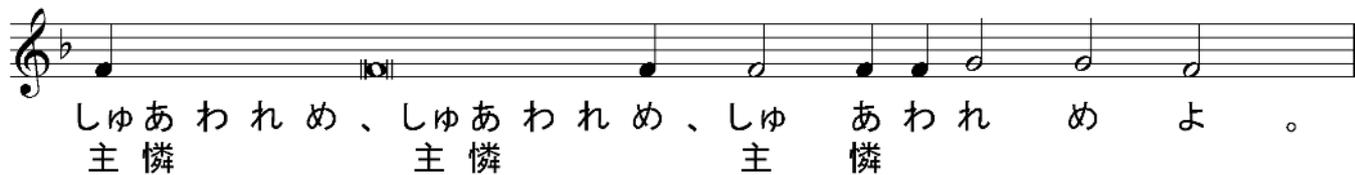
【 重聯禱 】

司祭) <sup>かみ なんぢ おおい あわれみ よ われら あわれ なんぢ いの き い あわれ</sup>  
神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>またわがくに てんのうおよ くに つかさど もの ため いの</sup>  
又我國の天皇及び國を司る者の爲に禱る、



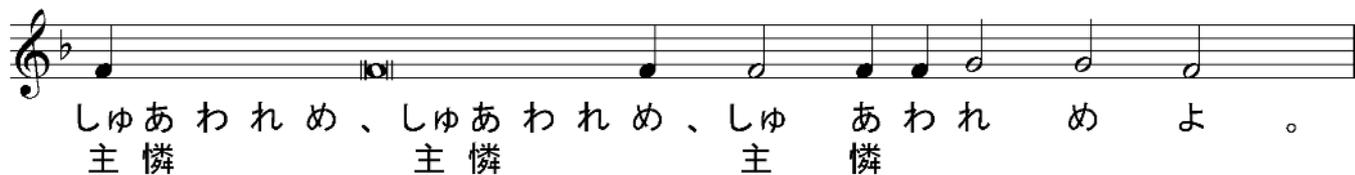
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>またきょうかい つかさど そんき われら ぜんにつぼん ふしゅきょう そんき われら せんだい</sup>  
又教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教ダニイル、尊貴なる我等の仙台  
<sup>だいしゅきょう およ お ことごと われら けいてい ため いの</sup>  
の大主教セラフィム、及びハリストスに於ける悉くの我等の兄弟の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>またつね きおく ふく こ せいどう こんりゅうしゃ およ すで ねむ ことごと ふそけいてい</sup>  
又恒に記憶せらるる福たる此の聖堂の建立者、及び既に寝りし悉くの父祖兄弟、  
<sup>こ ところ しょほう ほうむ せいきょう もの ため いの</sup>  
此の處と諸方とに葬られたる正教の者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>またかみ しょぼく こ せいどう けいてい じれん せいめい へいあん そうけん きゅうしょく けんこ かんゆう</sup>  
又神の諸僕此の聖堂の兄弟に、慈憐、生命、平安、壮健、救贖、眷顧、寛宥、  
<sup>およ しょざい ゆるし たま ため いの</sup>  
及び諸罪の赦を賜わんが爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>またこ せいどう もの たてまつ ぜんぎょう おこな これ ろう これ うた およ ここ た</sup>  
又此の聖堂に物を獻り、善業を行い、之に勞し、之に歌い、及び此に立ちて  
<sup>なんぢ おおい ゆたか あわれみ あお のぞ もの ため いの</sup>  
爾の大にして豊なる憐を仰ぎ望む者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) けだしなんぢ じれん ひと あい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま  
蓋 爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も  
いつ よよ  
何時も世に、



誦經) しゅ われら まも つみ こ くれ わた たま しゅわ せんそ かみ なんぢ あが ほ  
主よ、我等を守り罪なくして此の晩を度らせ給え、主吾が先祖の神よ、爾は崇め讃  
められ 爾の名は世に 尊み歌わる、アミン。

しゅ なんぢ たの よ なんぢ あわれみ われら た たま しゅ なんぢ あが ほ  
主よ、爾を恃むに因りて、爾の憐を我等に垂れ給え、主よ、爾は崇め讃めらる、

なんぢ いましめ われ おし たま しゅさい なんぢ あがめほ なんぢ いましめ われ さと たま  
爾の誠を我に訓え給え、主宰よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠を我に悟らせ給

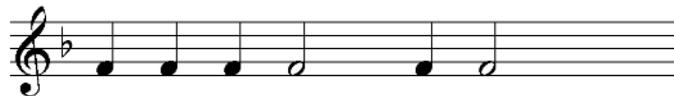
え、聖なる者よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠にて我を照し給え。

しゅ なんぢ あわれみ よよ あ なんぢ て つく もの す なか ほまれ なんぢ き  
主よ、爾の憐は世に在り、爾の手の造りし物を棄つる勿れ、讃は爾に歸し、

うた なんぢ き こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
歌は爾に歸し、光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

【 増聯禱 】

司祭) われらしゅ まえ わ くれ いのり ま くわ  
我等主の前に吾が晩の禱を増し加えん、



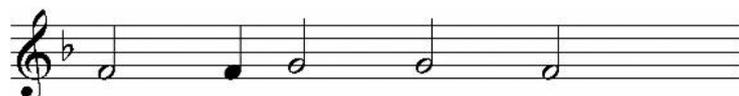
しゅあわれめよ。  
主 憐

司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも  
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



しゅあわれめよ。  
主 憐

司祭) こ くれ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと  
此の晩の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、



しゅ たま え よ。  
主 賜

司祭) <sup>へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしゃ たま しゅ もと</sup> 平安の天使、正しき教師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、



司祭) <sup>われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと</sup> 我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、



司祭) <sup>われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと</sup> 我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



司祭) <sup>われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと</sup> 我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



司祭) <sup>われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ</sup> 我等の生命の終がハリストティアノンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及びハ  
<sup>おそ べ しんぱん おい よろ こたえ たま もと</sup>リストスの畏る可き審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、



司祭) <sup>しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ</sup> 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

<sup>しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら</sup> 諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

<sup>いのち もつ かみ いたく</sup> 生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) <sup>けだしなんぢ ぜん ひと あい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま</sup> 蓋爾は善にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も

<sup>いつ よよ</sup> 何時も世に、



司祭) <sup>しゅうじん へいあん</sup> 衆人に平安



司祭) <sup>われら こうべ しゅ かが</sup> 我等の首を主に屈めん



司祭) (黙經) <sup>しゅわ かみ てん かが じんるい すく ため くだ もの なんぢ しよぼく なんぢ</sup> 主我が神、天を屈めて人類を救うが爲に降りし者よ、爾の諸僕と爾の

<sup>しぎょう かえり たま けだしなんぢ しよぼく なんぢおそ ひと あい</sup> 嗣業とを顧み給え、蓋爾の諸僕は、爾畏るべくして人を愛する

<sup>しんぱんしゃ こうべ かが おのれ くび ふ ひと たすけ ま すなわちなんぢ あわれみ</sup> 審判者に首を屈め、己の頸を伏し、人の助を俟たず、乃爾の憐を

<sup>ま なんぢ すくい あお もと かれら つね まも かれら こ ゆうべ つぎ いた</sup> 俟ち、爾の救を仰ぐ、求む彼等を恒に護り、彼等を此の夕にも、次て至る

<sup>よる およそ てきおよそ あくま かんぼう むな しりよ あ いねん まも たま</sup> 夜にも、凡の敵凡の悪魔の姦謀と虚しき思慮と悪しき意念とより護り給え、)

<sup>ねが なんぢちち こ せいしん くに けんべい さんようさんえい いま いつ よよ</sup> 願わくは爾父と子と聖神の國の權柄は讚揚讚榮せられん、今も何時も世に、



【 挿句讚頌 第2調 】

誦經) <sup>きゅうせいしゅ なんぢ ふくかつ ぜんせかい てら なんぢ おのれ ぞうぶつ め たま</sup> ハリストス救世主よ、爾の復活は全世界を照せり、爾は己の造物を召し給え

<sup>ぜんのう しゅ こうえい なんぢ き</sup> り。全能の主よ、光榮は爾に歸す。

句) <sup>しゅ おう かれ いげん き</sup> 主は王たり、彼は威嚴を衣たり。

讚頌) <sup>きゅうせいしゅ なんぢ き き よ のろい むな なんぢ ほうむり し けん ほろぼ</sup> 救世主よ、爾は木にて木に縁る詛を空しくし、爾の葬にて死の權を滅し、

<sup>なんぢ ふくかつ わ やから てら たま ゆえ われらなんぢ よ いのち ほどこ わ</sup> 爾の復活にて吾が族を照し給えり。故に我等爾に呼ぶ、生命を施すハリストス我が

<sup>かみ こうえい なんぢ き</sup> 神よ、光榮は爾に歸す。

句 故に世界は堅固にして動かざらん。

讃頌 ハリストスよ、爾は十字架に釘せらるる者と顯れて、造物の美しきを變易せり。

ただへいそつ ざんにん ほこ もつ なんち わき さ じん なんち けん し はか  
惟兵卒は残忍にして戈を以て爾の脅を刺し、エウレイ人は爾の權を知らずして墓  
ふういん もと じれん よ ほうわり う みつかめ ふくかつ しゅ こうえい  
を封印せんことを求めたり。慈憐に由りて葬を受け、三日目に復活せし主よ、光榮は  
なんち き  
爾に歸す。

句 主よ、聖徳は爾の家に屬して永遠に至らん。

讃頌 生命を施すハリストスよ、爾は死に屬する者の爲に甘じて苦を受けて、有能者

ちごく くだ かしこ なんち こうりん ま もの つよ もの て うば ちごく か  
として地獄に降り、彼處に爾の降臨を待つ者を強き者の手より奪いて、地獄に易えて  
らくえん す たま ゆえ なんち みつかめ ふくかつ さんよう われら しょざい きよめ おおい  
樂園に住むを賜えり。故に爾の三日目の復活を讃揚する我等にも諸罪の潔淨と大  
あわれみ あた たま  
なる憐とを與え給え。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

生神女讃詞 嗚呼新なる奇跡、古の悉くの奇跡に勝る者や、誰か夫なき母が萬物

たも しゅ う そくて いだ し こ さん かみ むね いた いさぎよ もの  
を有つ主を生みて、其手に抱くを知りたる、此の産は神の旨なり。至りて潔き者よ、  
なんち おさなご おのれ て いだ しゅ まえ はは いさみ もつ われらなんち とうと もの  
爾が嬰兒として己の手に抱きし主の前に母の勇を以て、我等爾を尊む者の  
たましい あわれ すく つね いの たま  
靈を憐みて救わんことを常に祈り給え。

奉神者シメオンの祝文 主宰よ、今爾の言に循いて、爾の僕を釈し、安然として逝か

けだしわ め なんち すくい み なんち ばんみん まえ そな もの こ いほうじん たら  
しむ。蓋我が目は爾の救を見たり。爾が萬民の前に備えし者なり、是れ異邦人を照  
ひかり およ なんち たみ さかえ  
すの光、及び爾の民イスラエルの榮なり。

聖三祝文 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。アミン。

至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を赦

せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に囚る。

しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ  
主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。アミン。

てん いま われら ちち ねがわく なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね てん  
天に在す我等の父よ、願は爾の名は聖とせられ、爾の国は來り、爾の旨は天

おこな ごと ち おこな わ にちよう かに こんにちわれら あた たま われら  
に行わるるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に

おいめ もの われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いざない みちび なおわれら  
債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我等

きょうあく すく たま  
を凶惡より救い給え。

司祭) けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。



【 主日の發放讚詞 第2調 】



き い す 。

【 生神女讃詞 第2調 】

こうえいはちちとことせいしんにきすす、い今  
光 榮 父 子 聖 神 歸

まもいつもよよに、アミン。  
何 時 世 世

しょうしんぢよよ、なんぢのおうぎはみなちえに  
生 神 女 爾 奥 義 皆 智 慧

こゆ、みなしえいなあり。ていけつの  
超 皆 至 榮 貞 潔

ふうぜられ、どうていのまもらるる  
封 童 貞 守

に、なんぢはじつのははとしられて、ま真  
爾 實 母 知

ことのかみをうみたまえり。かれにわ我  
神 生 給 彼 我

れらのたましいのすくわれんことをいのり  
等 靈 救 祈

たまあえ。  
給

司祭) <sup>かみわれら たのみ</sup>ハリストス神我等の<sup>こうえい なんぢ き</sup>侍よ、<sup>こうえい なんぢ き</sup>光榮は爾に歸す、<sup>こうえい なんぢ き</sup>光榮は爾に歸す、